

SONRISA

# そんりさ

Vol.141



メキシコ・ナルコ回廊再訪

グアテマラ・トドスサントス郊外の市場（2000年、日本人観光客殺害事件の直後）

- |    |                                 |        |
|----|---------------------------------|--------|
| 02 | メキシコ紀行・ナルコ回廊再訪                  | ……山本昭代 |
| 07 | CLIJALの活動から「日本の児童書とラ米」          | ……細江幸世 |
| 09 | ああ、ボランティア グアテマラ天然染色             | ……村岡貞夫 |
| 10 | ラ米百景「在米キューバ人作家 E・デスノエス」         | ……伊高浩昭 |
| 11 | アイマラの詩「ジャガイモ小母さん」               | ……栗原重太 |
| 12 | 音楽三昧♪「ポルカのリズムで立ち上がれ」            | ……水口良樹 |
| 14 | 食巡り「ソーセージと豚コココーラソース丼」…ミゲル・アクーニャ |        |
| 15 | ニュースクリップ                        | ……さざえ  |

2013年2月9日 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク (RECOM) 発行

# メキシコ・ナルコ回廊 再訪 (2)

～メキシコシティからシウダー・ファレスへ～ 山本昭代

前回に引き続き、2012年8月のメキシコ旅行のお話を。

メキシコシティから飛行機で約2時間、クリアカンはメキシコ北部の太平洋に面したシナロア州の州都である。空港の建物を出たとたん、ムッした熱気に包まれる。夏場は平均気温が30度近くなるこの暑い街は、メキシコの大物ナルコ(麻薬マフィア)を輩出したいわくつきの土地だ。

中心街は清潔で活気があり、一見ごく普通の地方都市だが、そこは100年以上前からシナロア山中で栽培されるケシやマリワナが生み出すドルで潤ってきた街だけに、独特の風土をはぐくんでもいる。

ナルコの神様とも呼ばれる「ヘスス・マルベルデ」については、以前にも「そんりさ」に書いたことがある。メキシコ革命時代の義賊だったとされるマルベルデは、地元の庶民に親しまれる「聖人」で、今回もさっそく、中心街近くのマルベルデの廟に詣でた。中心街にほど近い緑色の建物は去年訪れたときと何も変わらず、カルデロン政権の麻薬戦争などこ吹く風だったのか、あいかわらず参拝客で繁盛している様子だった。

## クリアカンの宮殿墓地

クリアカンならではのもののひとつが「ナルコ墓地」である。クリアカンの街の南のはずれにあるウマヤ庭園墓地。広大な敷地の高級分譲墓地で、入口から奥まで自動車に入れるようになっている。入口あたりはごく普通の墓地だが、奥に進んでいくにしたがって、大理石造りの礼拝堂付きの巨大な墓が、豪華さを競い合うように建ち並ぶのが見えてくる。十字架がついた丸いイスラム建築風の屋根が並ぶところは、遠目にはエルサレムかどこかの風景のミニチュアのような。連れて行ってくれたタクシー運転手も、足を踏み入れるのは初めてだったらしく、珍しそうに眺めていた。



大理石造りの礼拝堂が並ぶ

礼拝堂は2階建てのもの、ダンスフロアー付きのものもあり、日本式にいうと4畳半くらいから、ちょっとした一戸建並みの巨大なものまで。照明もクーラーも完備されているのは、永久の眠りにについている人はともかく、暑い中を墓参りに来た人たちが快適なひとときを過ごせるように、さらにそのお参りが深夜だったりもするから、ということらしい。

ここに眠るのは、大物マフィアから中小のその道の人たちまで、大部分がその関係の人たちとその家族だという。墓標に刻まれた名前と年齢を見ていくと、20代から30代、40代と若い男性の墓が目立つ。ガラス張りの礼拝堂のなかには、カウボーイハットをかぶって尻ポケットに銃を入れてポーズをとった、いかにもという写真が飾ってあったり、おもちゃの車が並んでいたり。そのガラスも防弾仕様になっているものもあるそうだ。ガラス部分が鏡張りになっていて、内部が見えないようになっているのが一番怪しい。

興味深いのは、墓にたくさんの写真が飾られていることで、普通の十字架だけの墓でも、顔写真と故人への哀悼をささげる言葉をプリントしたビニール製のポスターが掲げられていたりする。メキシコシ

ティの友人は、そんな墓はほかでは見たことがない、といていた。

とにかく、このウマヤ墓地に葬られるには、亡くなった当人の家族が墓地の地所を買い、それなりの墓標を建てられるだけの大金を持っていることが前提になる。墓地で働く建設労働者が通りかかったので尋ねてみると、墓地の小さい1区画で3万ペソ

(約18万円)、普通のシンプルな十字架の墓標が4万5000ペソ(約27万円)、大理石造りの礼拝堂を建てようと思えば100万ペソ(600万円)以上かかるだろう、という。これ以外に、毎年維持費にけっこうな額がかかる。生きている人間のために立派な家が建てられる値段である。

その人によれば、以前、アメリカのテレビ・レポーターがこの墓地に取材に来たことがあったという。8か月にわたってテレビカメラを据え付け、表向きは豪華な礼拝堂が完成するまでを追いながら、実際は墓地のあちこちに仕掛けたカメラで、誰か有名ナルコの家族が墓参りに来るのを待ち構えていたのだという。大物ナルコの墓には名前が出されていないので、どの墓地が誰のものかわからない。工事人はそれを知っているので、墓地で働く者全員に金を配って情報を集めたのだそうだ。ここは文字通り、地獄の沙汰も金次第の世界だ。

## 十字架の街

墓地だけでなく、クリアカンでは、道路際などでもしばしば十字架に出くわす。人が亡くなった場所に記念のために建てた十字架や碑が、この街には200以上もあり、「十字架の街」と呼ばれることもあるという。シナロア自治大学近くの中央分離帯で見かけた十字架には、死を悼む言葉が添えた若い男性の写真の、1メートル近いビニール製のポスターが立てかけられ、故人の誕生日か命日かにささげられた色鮮やかな造花とアルミ風船が揺れていた=写真。亡くなった原因が事故か事件かは、ポスターからは読み取れなかった。

この街でおそらくいちばん有名であろう十字架を見に行った。市内の自動車用品の大型スーパーの駐



車場にある、人の背丈ほどの十字架である。2008年5月にその場所で殺害された3人の若者を悼んで建立したもので、その3人の頭文字が刻まれている。メキシコ最大のカーゴといわれるホアキン・「チャポ」・グスマンの、当時大学生だった息子と、そのいとこと友人の一人である。襲撃犯は15人以上で、バズーカまで用意していたという。息子の死を深く悲しんだチャポは、一説にはメキシコの北部にあるバラの花を全部買い占めて葬式に使ったとか。犯人グループは、チャポの盟友だったイスマエル・「エル・マヨ」・サンバダが送りこんだことがのちにわかり、チャンポとマヨ・サンバダの間で激しい戦闘が繰り広げられることになった…。

街を案内してくれたタクシー運転手によると、クリアカンで金持ちといえば大方はナルコで、中心街の北に広がる高級住宅街や、郊外に建てた豪邸に住んでいる。「ここのガソリンスタンドも、あそこの商業施設も、某ナルコのものだ。あまり逮捕されてしまうと、地元での仕事がなくなって困る」と笑った。マリワナの収穫時期には多くの人手が必要になるので、街中からも大勢集められて山の中に働きに行く。日給は食事付きで300ペソ(1800円)と、ほかの仕事よりずっといいそうだ。麻薬栽培と密輸は実際、この地域に深く根を下ろした地元産業であるのは、誰もが認めるところなのだ。

## シウダー・ファレス

クリアカンから飛行機を乗り継いで、チワワ州の国境の街、シウダー・ファレスへ。この街はいわゆる「ツイン・シティ」で、国境になっているリオ・グ



空き店舗ばかりが続くフアレスの一角



フアレスで殺害された女性たちを悼む記念碑

ランデ川の向こう側のテキサス州エルパソとはもとはひとつの街だった。これが19世紀の米墨戦争でメキシコが敗れ、川の北側がアメリカ領になった。

空港から市街地まで、タクシーで300ペソ、バスなら6ペソ。安いのが大好きな私は重いスーツケースを引っ張って当然のようにバスに乗り込んだが、「ここはほかのとこじゃなかった!」と焦ったのは、バスの運転席の脇に貼られた「恐喝には応じないぞ」という張り紙を見たとき。ここは戦闘状態にある地域以外では世界で1番だか2番目だかに危険といわれる街なのだ。終点までの約1時間、緊張して周りに目を凝らしていたが、バスの乗客も街の風景も、普通の地方都市と様子は変わらなかった。

中心街でバスを降り、ネットで予約した安ホテルまでタクシーを頼んだ。賑やかな表通りから1本裏に入ると、ぎょっとするような取り壊しかけの建物ばかりのゴーストタウンの風景が。運転手によると再開発の工事中なのだということだが、私が予約したホテルもそのゴーストタウンのはずれにあった。ホテル自体はまあまあきれいで設備も近代的だったけれど、周りは営業しているのかいないのかわからないような、くすんだ色のビルばかり。その場で回れ右して帰りそうになったが、ほかの場所のあてもなく、1泊25ドルという安さもあって、とりあえず1泊することに。

ホテルの並びの古ぼけた店を見ると、パーティー用品やレンタルドレスの店ばかりで、近くには貸パーティー会場もあった。あとで人に聞くと、これも国境の街ならではのものだという。アメリカ側の人たちが、安上がりにパーティーをするためにやっ

てくるのだ。アメリカでは20歳にならないとアルコールは飲めないが、メキシコに来れば18歳から飲める。少しくらい羽目を外しても、メキシコでは警官に賄賂を払えば見逃してもらえる。結婚式やメキシコ系の人たちの習慣の15歳の女の子の誕生パーティーも、同じ予算でもアメリカ側でやるよりずっと豪華にできるというわけだ。

別のホテルを探して、ネットで見た住所を頼りにバスに乗った。街角で道をたずねると、みなとても親切に教えてくれる。フアレスの人はもともとフレンドリーで親切なのだ。しかし最近では治安が悪くなり、よその人とは目を合わせないなど、用心深くなってきてしまったようだ。

アメリカ風の広い道路にファーストフードやチェーンレストランの並ぶ近代的な風景があり、さらに病院が立ち並ぶ地区がある。これも国境の街ならではの。安く医療を受けるために、アメリカ人がフアレスにやってくるのだ。

しかし探していたホテルのあるあたりまで歩くと様子がおかしくなってきた。4車線のメインストリートなのに、バスも走らず、道路の両側の商業施設がことごとく閉まっていて、「貸店舗」の看板ばかり。まだ新しい店舗も閉店している。マフィアの恐喝のせいなのか？ 人通りも少なく、歩道には大きな穴があいていた。これはまるで戦争のあとの風景だ。パトカーや警官の姿もあちこちで見かけた。そんな地区だけに、探し当てたホテルの周囲には営業している食堂も商店もほとんどなく、あきらめて帰ることにした。

## 国境を越える

ファレスとエルパソは、リオ・グランデ川を越える4つの橋で結ばれている。そのうち歩いて渡れるのがサンタフェ橋。入口で6ペソを自動支払い機に入れて橋を渡る。橋の長さの割に川の水は少なく、土手に「人殺しの国境警備隊」などとペンキ書きされているのが見える。橋の真ん中に国境を示すプレートがあり、その先に黒いサングラスに黒い制服の、いかにも、という風情のアメリカ人警官がいたので写真を撮ると、「写真を消せ、消さないと連行するぞ」と怒鳴られた。

アメリカ側に着き、入管の前で30分ほど列に並んでパスポートを見せると、脇にある建物に行けと指示された。20人程が椅子に座って待っていたが、入管の係官は窓口で2人だけ。そのうち1人は会計だけ担当し、手続きはしない。窓口の奥の人同士、冗談を言い合いながらのんびりやっている。待ってる人がこんなにいるのに、これって人種差別じゃないの？とイライラしたが、周りのメキシコ人はこんなものとあきらめているらしく、いたって落ち着いたものだった。2時間も待たされて、やっと順番が来た。渡されたのは、いつも飛行機の中で記入する入国管理カードで、入国税6ドルを払えと言う。あいにくドルの持ち合わせがなく、入管には銀行もキャッシュディスプレイもない。しかたなく手続きを待つ列の人たちに向かって、「誰か両替できる人、いませんか？」と声を張り上げると、2、3人が手を挙げてくれ、すぐに両替してもらえた。さらに別の建物で手荷物検査などをして、晴れてエルパソ側に出たときにはもう3時間が経過していた。たった6ドル払うために、3時間！

この国境の橋を毎日のように渡って通勤している人も多く、たいがいのファレスの住民は、エルパソの一定の地域までなら自由に行き来できるビザを持っている。その地域を越えて行きたい場合は、先の建物で何時間も待って手続きをしなくてはならない。最近ではアメリカの市民権を申請する人が多く、ファレス市民の多くに若い世代の多くが、治安の悪化を嫌ってエルパソに移り住んだという。

それにしても、そこを越えただけで、風景も人の態度も一変するのが国境というものなのか。エルパソの中心街には瀟洒なビルが建ち並び、歴史的な建物を保存した一角もある。ここエルパソは、アメリカ全土でももっとも治安のよい街のひとつだそう。犯罪都市・ファレスと隣り合っているが、どうして？ エルパソには米軍基地もあり、警察の取締りが厳しいので、犯罪者も自重しているらしい。実際、金のあるナルコは、家族と静かに暮らすためにエルパソ側に住んでいることも多いそうだ。何か事を起こしたいときはファレス側でやるというのか？

エルパソ散歩を終え、暗くなる前にファレス側に戻ろうと、メキシコ系らしい地元の人に道をたずねると、怪訝な顔で「なんでファレスになんか行くんだ？」と驚かれた。「気をつけなさいよ」という言葉聞くのは、もう何度目かだった。

来たときと同じサンタフェ橋を渡る。橋の入り口で通行料を払って、周りを見回すが、どこにもパスポートをチェックする場所がない。けっきょく、ノーチェックのままメキシコ側に出てしまった。

サンタフェ橋にほど近いところに、大聖堂があり、その脇が市場になっている。市場はまだ明るい6時頃には店じまいを始め、代わって酒場の前に人の姿が目立ってきた。角ごとに人待ち顔の男や女が立っている。よい子は、夕食と朝食用の食べ物を買って、ホテルに急ぎ足で向かわなくちゃいけない時間だった。

## 砂漠の中のマキラ

翌日、ホテルの前で客待ちをしていたタクシーと交渉して、ファレス案内をお願いした。運転手のアドルフォさんは、19歳の時からもう40年もファレスでタクシー運転手をしているという。自分の兄弟らも子ども2人も孫たちもみなアメリカ側に住んでいて、自分もアメリカ側に行こうと思えば行けるが、ファレスが好きなのだ、といった。最近では治安は落ち着いてきているそうだ。地元新聞では毎日のように殺人事件の報道があるようだが…。

まず案内してもらったのが、マキラドーラと呼ばれる輸出加工工場。最初に通りがかった中国系の工場2つは、マフィアの強請に遭って閉鎖していた。新聞報道によれば、撤退する工場もある一方で新たに参入する外資もあり、フアレスではマキラは順調に成長しているとのこと。フアレスの南東に広がる工場地帯には近代的な工場が点在し、工場の脇には貨物専用の鉄道があった。1日数回、深夜や明け方にアメリカ側の工場との間で貨物列車が行き来するという。工場のひとつのすぐ脇に、可愛いイラストで飾られた保育園があった。これが、工場が雇用する大勢の女性従業員のために欠かせないものなのだ。毎日交代制で働く従業員のために、郊外の住宅供給公社の団地からバスの便があり、母親たちも子どもを連れて出勤してくるのだ。

その工場労働者たちのための団地にも連れて行ってもらった。半砂漠地帯の埃っぽい山肌に張り付くようにして建っている、パステルカラーに塗られたささやかな家々。思わず、「クリアカンの墓の方が大きい…」とつぶやいてしまった。周りには何もなく、買い物もバスで郊外の大型スーパーに行くしかない。

次いでアドルフォさんに連れて行ってもらったのが、国境の橋から遠くに見えていた、山肌に「聖書は真実なり。読みなさい」と大書された山のふもとの地区。急斜面を縫うように上り下りする狭い道路と貧しげな家々が軒を並べる地区の真ん中に、巨大な塔のある教会が建っていた。「世界の光教(Luz del Mundo)」というメキシコ発祥のキリスト教系新興宗教の教会で、山にその文字を書いたのはこの教会なのだそう。数年前まではフアレスでも有数の治安の悪い地区で、ギャングがはびこっていたが、教会の活動もあってか、最近では暴力は格段に減ったという。ギャング団につきもののグラフィティ(壁の落書き)も目につかない。アドルフォさんによると、描かれたらすぐに消して、きれいな絵を描き直しているのだという。

生粋のフアレスっ子のアドルフォにとって、国境も遊び場のようなものだったという。エルパソとの



飛行機から見たフアレスのマキラドーラ

間には水路や排水管などがたくさんあって、有刺鉄線を越えなくても、行き来できる場所がたくさんある。小さい頃、水路のひとつにもぐりこんでエルパソ側に出、また戻ってきたことがあると教えてくれた。フアレスが急拡大したのは、北米自由貿易協定が結ばれた1994年から。メキシコ中から大勢の人が職を求めて流れ込んできた。しかし6年前にカルデロンが大統領に就任するまでは、フアレスはそれほど暴力的ではなかった。企業や商店に対するひどい恐喝も、始まったのはそれから後だという。

フアレスは今後、平安を取り戻していくことができるのだろうか？ メキシコシティへの帰りの飛行機で隣になったエルパソ在住だという男性は、「ここ数年のうちには難しいだろう」と眉をひそめた。フアレスに限らず、メキシコ全土に拡大したこの麻薬戦争は、いつ、どのようにして、終息を迎えることができるのか？ 新しく大統領に就任したペーニャ・ニエトに、確固とした処方箋があるようには見えない。ウサマ・ビンラディンを米軍が殺害したように、チャポ・グスマンをやっつけたとしても、問題が解決するわけではない。私たちは遠くから、見守っているしかないのだろうか。

# 日本ラテンアメリカ子どもと本の会 (CLIJAL)の活動から 日本の児童書から見るラテンアメリカ

細江幸世

子どもの本で南米を舞台にした物語といえば、1927年には翻訳されていた『母を尋ねて三千里』を思い起こす方が多いかもしれません。イタリアからアルゼンチンに働きに出た母をさがして旅を続けるマルコの姿はアニメ番組にもなり、ポンチョを風になびかせ、パンパを進む珍しい風景に心躍らせました。でも、これはイタリア人作家アミーチスが1886年に書いた『クオレ』で語られる毎月のお話の中の1つです。2010年に『多文化に出会うブックガイド』（読書工房）を編集した際、ラテンアメリカを舞台にした児童書43冊のうち、現地の作家か画家によるものは14冊。まだまだ日本の子どもたちがラテンアメリカの作家や画家の作品に触れる機会は少ないと言えるでしょう。

ところが、現在はあまり手に取られていませんが、1960年代から70年代にかけて、日本の創作児童文学の興隆時に、ノンフィクションや史実をもとに書かれたシリーズが企画され、ラテンアメリカに目を向けて描いた本が何冊か刊行されていました。

『おいしいのぼうけん』（童心社）がロングセラーとなっている古田足日(1927-)は『コロンブス物語』（1964年、三十書房「少年少女探検家物語」シリーズ）、『インカ帝国のさいご』（1977年、岩崎書店「こどもノンフィクション」シリーズ）の2冊を上梓しています。また、平凡社「児童百科事典」の編者であり、『指輪物語』や『ナルニア国物語』の訳者としても著名な瀬田貞二（1916-1979）も『航路をひらいた人々』（1967年、さ・え・ら書房「さ・え・ら伝記ライブラリー」）でコロンブスを、骨太な作風で知られる乙骨淑子(1929-1980)は『八月の太陽を』（1966年、理論社）で、ハイチ革命の指導者であったトゥセン（トゥサン・ルベルチュール）を主人公に執筆しました。これらの本は、それまで書かれていた伝記本のコロンブスや世界七不思議としてのインカ帝国というものとは違った目で描かれているのが特徴です。

その頃、コロンブスといえば、「アメリカをはっ



（左より古田足日、瀬田貞二、塚原亮一の単行本表紙）

けんしたえらい探検家」で「しんぼうづよいばかりでなく、たいそうゆうきのある、なさげぶかい人」（1958年、偕成社「児童伝記シリーズ」沢田謙著・解説より）という捉え方で書かれた本が大半でした。絵本『コロンブスのぼうけん』（1992年、世界文化社）などは、第一回目の航海の初めて陸地を発見したところで話が終わっているしまつ。古田足日は、いわゆる偉人としてのコロンブスではなく、その「発見」にはじまる侵略の物語として『コロンブス物語』を書き、初版刊行から26年をへて、コロンブス航海500周年記念に合わせて文庫化された時には、翻訳された基本文献（岩波書店「大航海時代叢書」のラス・カサスの著作や増田義郎氏の著作など）を参考に間違っていたところを書き改めています。けれど、そのフォア文庫版の扉に書かれた「コロンブスはアメリカを『発見した』といわれる。しかし、『発見』というのはおかしい、と、ぼくは思う。きみは、どう思うか？」と、問う視点は変わってはいません。スペインの旗がインディアス諸島やパナマに翻っていく情景と自身の子どもの頃、日本軍が中国の都市を占領するたびに、中国の地図に日の丸の旗を立てていった姿が重なって見えた「あとがき」で告白しているのが、重く心に残ります。

『インカ帝国のさいご』では、二つの文明が衝突し、ヨーロッパの文明が自分の考え方を押し通した結果が、インカ帝国の崩壊となったと説き、それは今の世界でも同じように起こっていることなのだと言っています。過去から現在の自分たちの在り方を

照らし出し、また振り返って史実を解釈する作家の姿勢が、それまでのとおりいっぺんな描き方とはちがったものを子どもたちに提示しているように思えました。

瀬田貞二は『航路をひらいた人々』でコロンブスなどの大航海時代の探検家たちを「それまでだれもやったことのない冒険を、おおしくやってのけて、歴史をきりひらいた代表」と称していますが、それを「できるだけ大げさな言葉や文章を使わず、できるだけ直接の資料を読んで、ただ事実をはっきりと述べるように」した、とも記しています。その姿勢は1956年に完結した『児童百科事典』によるものと言えるでしょう。

『児童百科事典』の理念として「やさしい話から知識へ、身ぢかな事がらから深い道理へ、応用から原理へ、読むことから考えることへの、かけ橋でなければならない」と「まえがき」に記していますが、その項目の立て方、物語のように読んで楽しめるように書かれた文章には、今もって引き込まれてしまいます。わたしは瀬田貞二を調べるうちに、その根拠を支えたものとしてこの事典に出会い、図書館でメモを取りながら読むようになりました。それを半年くらい続けた頃、懇意にしている古書店「海ねこ」(<http://www.umi-neko.com/index.html>)の目録に、全巻揃いで出品されているのを見つけ、手許に置くことができたのです。

『児童百科事典』の「コロンブス」の項には、「くらい原住民の運命」という小見出しがあり、奴隷狩りや迫害があったこともしっかりと記載されています。「アメリカ」の項の「新大陸の発見」という小見出しには、「アメリカに移住した最初の人間はアジア人である、アメリカ・インディアンの先祖であり」、つぎに「ヨーロッパ北部の荒くれた船乗り」が漁場として見つけ、「コロンブスはいわば第3番目の発見者であったのだ」と書いている視点がおもしろい。1956年に講談社版世界伝記全集『コロンブス』を書いた塚原亮一（1920~1993 フランス文学者であり、子どもの本の創作、翻訳、評論も手がけた）は、「この伝記を読む人へ」で、コロンブスの成功

は前の時代の方が築き上げてきた学問や経験がもとになり、時代の要請がこの冒険を可能にしたのだと記しています。偉人として褒め称えるのではなく、この発見が人類の歴史の中でどのように行われ、どんな意味を持っていたのかを見ることが大切であること、また発見や冒険というものが一国だけを富ませたり、その結果、人間を苦しめたりするものであってはならないと感じたと書かれています。瀬田貞二や塚原亮一は海外の文献を手にする機会が多かったためか、日本の児童文学者の中でも、人物や物事の捉え方が大きく、複眼的であったように思います。

『八月の太陽を』を乙骨淑子が書いたのはちょうど60年代安保の頃。明治の少年雑誌『少年園』の中で、黒人として初めて独立国ハイチを築いたトウセンを主人公にした『黒偉人』が掲載されていることに、興味を持ち調べはじめたのだそうです。今回、改めて読み直し、まだ、海外の資料を手にするのも大変な時代に、遠い異国で時代も離れた人々の考えや心情に共感し、物語を紡いだ作家の想像力の深さ、この混乱の時節に集団と個人はどう在るべきか、という自身への問いかけも含んだ物語の構成力に驚かされました。小学生だったわたしが本書を手にした時は、時代背景等よくわからなかったものの、滝平二郎の切り絵の挿絵から、暑くうだるようなハイチの気候と人々の鬱屈した気持ちを重ね合わせて感じ取っていたように思い出されます。

今では『八月の太陽を』は「乙骨淑子の本第2巻」（全8巻・理論社）で、『コロンブス物語』は「全集古田足日子どもの本第12巻」（全13巻・童心社）でしか手に入れることはできませんが、図書館等で単行本を借りることはできます。CLIJALで読み合うことで、埋もれた力作にまた光を当てられるようにできればと思っています。



# ああ…ボランティア グアテマラ天然染色 村岡貞夫

色留めなど施しているの？

「バナナの幹を煮込んでその液体に漬込むマヤの伝統的方法……」

コレは何で染めたの？ ソレは？ アレは？

「にんじん、アチョーテ、ピーツ……」

2009年、天然染色が盛んに行われているという触れ込みと共に海外へ商品を売り出そうとしていたグアテマラ共和国ソロラ県アティトラン湖畔のサン・フアン・ラ・ラグーナ村にマーケティングの手伝いをするため赴き、職人たちの工房を訪ねた時の1コマです。村の天然染色について調べてみると、科学的根拠薄く、天然染色とは呼べない代物が数多く存在し、退色著しい不良品が目立つ悲しい現実が浮き彫りになりました。売らない方が良くないに違いありません。信用が無くなります。いったい誰が…？



バナナのなんちゃって媒染剤

バナナの幹は媒染剤代わりにはなりません。マヤの伝統方法と説明がありましたが、熱帯アジア原産のバナナが古くから中米に存在したとは考えにくい。オレンジ色冴える人參、繊維に染みつく様な強い色素はありません。木の実を煎じた茶色い粉アチョーテ。これも同様。ピーツ、色鮮やかでもやはり前述同様、料理に使う欲しい原料です。どれもこれも繊維上では短い時間と共に消えてしまう方法です。他にも、専門家の間で長年物議を醸し染色技術が確立されない植物サカティンタが原料として浸透しています。これについては、絹や羊毛、麻に比べて染が難しいとされる綿糸染を主流とする村には特にお勧めできない原料としか言いようがない。また、染め上り予想が付き難く日光堅牢度も低い難しい原料です。

さて、天然染色良かれと思って教えた外国人ボランティアが確かに居ました。同様に首都のグアテマラ人ボランティアが教えています。何故その様な教え方になったかは不明ですが、簡単な方法で、読み書きができなくても誰もが覚えやすかったのは事実。不適正方法は瞬く間に村人に浸透しました。村人はそんな商品を積極的に販売し、付加価値が高いと思った観光客が買いました。そして、不良品を知った購入者からの信用を失いました。これはいけないと、現実を知る人々が集中的に適正天然染色研修会を幾度か行いました。適正方法は前者に比べて複雑で忍耐が必要です。そして2013年、前述の不適正方法と問題（簡単、解りやすい、実は染まっていない）は今も解決していません。簡単な不適正方法と悪影響は確かに今も息づいているのです。

社会経験・実績の少ない人たちがボランティアと称して専門以外の

事を行う行為は後世に悪影響を及ぼしてしまう場合があるという現実を私達は認識しなければいけません。時に、自分にできる事から、といった言葉を耳にしますが、表面的知識で済む事と済まない事があるはず。個人的には村落開発ボランティアなどは危うい事例だと思っています。

それ故に、適正方法を繰返し実践できる天然染色研修センター開設の日がとても待ち遠しく、そんな様子を次回こそお伝えできようかと願ってやまない昨今です。最後に、村の職人の中には、児嶋英雄先生の教えを守り、適正なる天然染色をコツコツ行っている人たちも確かに居ると言う事を申し添えておきます。皆さまの更なるご声援、何卒よろしく願いいたします。

<http://manosunicas-a.blogspot.jp/>

## 連載第47回 『ラ米百景』

伊高浩昭（ジャーナリスト）

### 第65景

在米キューバ人作家E・デスノエスに訊く

キューバ人作家エドゥムンド・デスノエス（82）と先ごろ、電郵（eメール）を通じてインタビューした。『低開発の記憶』（1965年）の著者である。この小説はトマス・グティエレス＝アレア監督（1928～96）によって68年に映画化された。デスノエスは79年に亡命、ニューヨークに定住し、創作活動を続けている。2007年には『開発の記憶』を著わした。インタビューで特に興味深かった幾つかの点について紹介したい。

デスノエスは「西語（スペイン語）国民の特質」を説いた。西語には、世界を単次元的に観るという限界がある、というのだ。セルバンテスのドン・キホーテに象徴される人格は、強烈ではあるが、物の見方が限られている。これと対比されるのは、シェイクスピアのハムレットだ。ハムレットは深い懐疑心で際立つ。現代人は多元的世界で、懐疑と内面性をもって生きているが、西語国民には懐疑心が欠けている、と言いたげなのだ。

フィデル・カストロやチェ・ゲバラの明確な勝利と失敗は、攻撃的で理想主義的だが、多元的な懐疑の世界では「失敗」として断罪される、と主張する。デスノエスは母がフランス系ジャマイカ人であったことから英語を体得し、西英両語で小説を書く。英語のお蔭で複眼的視野を得たというが、西語の出自であり、西語の束縛から逃れられないという。

この懐疑と関連するが、デスノエスは「革命か反革命か」、「キューバか米国か」という

ような二者択一を敵視する。人は二項対立にしばしば身を置くが、どっちつかずで、単純に片方を選ぶことができず、矛盾を抱え逡巡する、二律背反に悩む存在なのだ。『低開発の記憶』の主人公は、二者択一を迫る革命体制下で批判眼を光らせて生きる優柔不断なプチブル知識人である。

だが21世紀の現代キューバの人々は、社会主義の行方に懐疑心を抱いている。『低開発の記憶』が再評価されている。デスノエスはキューバ人として、同胞の幸を祈りながらも、かつてのような強烈なドン・キホーテ精神の支配下のキューバでなく、ハムレット的懐疑に充ちた現代の方が全うだと観るのだ。

以上のような考えに立ち、キューバの状況を「西語と西語国民の狂信主義による悲劇だ」と捉える。革命でバティスタ独裁を倒したのに続き、ヒロン浜で米政府の傭兵部隊を撃破したことからフィデルらは自信過剰になり、ラ米革命と第三世界の指導国だと自らを信じ込んだ。ここに最大の過ちがあった、と指摘する。

だが、米国や反革命派亡命社会が望むような「体制変換」には反対する。キューバのキューバ人が自発的に生きるべき方向を見出していくのを望んでいる。デスノエスは、スペイン植民地時代からのキューバ史を鳥瞰し、「革命体制はキューバ史のほんの一局面にすぎない」と言い切る。

デスノエスとの一問一答式のインタビュー内容は、月刊誌『LATINA』の2013年1月号（12年12月刊行）の「ラ米乱反射」を参照されたい。

## ジャガイモ小母さん

ジャガイモ小母さん  
あなたが良く実ると  
私たちはみんな幸せになる  
あなたが良く実ると  
あなたはお金に変わる

ジャガイモ小母さん  
あなたが良く実ると  
売って服を買う  
あなたが良く実ると  
みんなお腹いっぱいになる

ジャガイモ小母さん  
あなたが良く実ることを  
みんな願っている  
日照りが続くと雨を願う  
膝まずいても雨を願う

ジャガイモ小母さん  
あなたなしではお腹を一杯にできない  
あなたがいてこそお金ができる  
あなたがいてこそ豊かになれる  
あなたが実らなければ貧乏になる

ジャガイモ小母さん  
あなたは金にも銀にも変わる  
ジャガイモ小母さん  
包丁で失礼します  
あなたのきれいな目を包丁で取って  
皮を灰の上に捨てさして下さい

第1回アイマラ学童児童詩コンクール、  
1999年より  
編集：サンガブリエルラジオ放送  
訳：栗原重太

## 音楽三昧♪ペルーな日々 (第49回)

# ポルカのリズムで立ち上げれ

ズンチャンズンチャンと激しい2拍子にのせて、くるくると廻りながら踊るカップルたち。狭い長屋(カジェホン)で夜が更けてもますます盛り上がっていくフィエスタ。ペルーの沿岸部の町衆にとって、ポルカは永らくフィエスタのテンションを一気に盛り上げる花形の音楽の一つだった。今回はそんなポルカについて少し紹介してみたい。

ポルカは、1830年代末よりチェコやポーランドで流行し始め、時を置かずあつという間にヨーロッパで一世を風靡するまでになった。この東欧の民族音楽は、アップテンポの陽気な音楽と勢いのある踊りが魅力で、なんと1850年頃には、サルスエラ(民衆オペレッタ)を通じてペルーで公演されている。このことからものすごいスピードで新大陸へと伝わったことがわかる。クリオーヤ音楽の花形バルス(ワルツ)も同時期にペルーに伝わったとされており、両者は共に沿岸部の民衆音楽として20世紀初頭には非常に人気の高い音楽として愛されるようになっていった。

さて、南米に伝わったポルカには、面白い現象が生じた。ペルー以北ではだいたいポルカといえばヨーロッパと同じ2拍子の「いわゆるポルカ」が土着化したものなのだが、ボリビアやパラグアイ、アルゼンチンなど南部の方ではなぜか6/8拍子の音楽にポルカと名前が付けられている。6/8拍子なので、基本リズムは3×2の2拍子ではあるものの、ベースラインが明らかにブンチャンチャン・ブンチャンチャンと3を刻みながら疾走感あるものとなっており、こちらも盛り上がる音楽ながら、かなり異なる音楽へと変質してしまっている。まあ、そういう変わり種も含めて、南米大陸でもポルカは非常に人気を博した音楽であったということなのである。



さて、話をペルーに戻すとしよう。

作者不詳のガエルディア・ビエハの時代から、20世紀に入って作曲者の名前が残るようになっていった時代、バルスの名作を数多く作ったのがフェリペ・ピングロ・アルバ=写真左=なら、ポルカ王と呼ばれ多くの名作を遺したのが、ピングロの友人でもあったペドロ・エスピネル・トーレス=同右=だった。彼は「カンペシーナ」「アンエロス」など、現在でも愛される名ポルカを数多く作曲した。こうした綺羅星のような作曲家が出てきて名曲が沢山生み出されると、他の作曲家たちも刺激され、競争するように名曲を作るようになり、そのジャンル自体が盛り上がるものである。そういう意味でも20世紀の前半期はポルカにとって黄金時代であった。

余談だがペドロ・エスピネルの作曲した名ポルカの一つである「カンペシーナ」などは、最近活躍しているジャズ・クリオーヤの歌姫ピラール・デ・ラ・オスにより、秀逸なアレンジでまったく古さを感じさせないかっこいい音楽へと生まれ変わったりもしている(もちろんもとの曲が素晴らしいからなのだが)。こうした人気曲を現代風にアレンジしていくのも南米でもよく見られる手法だが、ポルカも

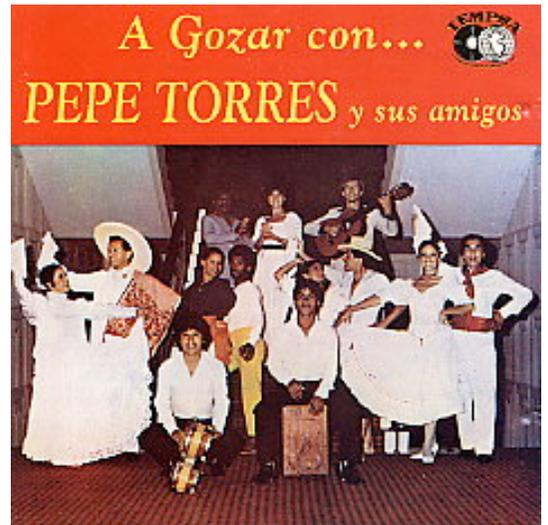
今なおこのように時代時代にあった形に繰り返しアレンジされながら愛されているのである。

さて、こうしたクリオーヨたちの音楽は、先程も述べたが、主に下町（バリオ）のちょっとしたパーティや休日の娯楽として楽しまれていた。ギターやピアノ、カスタネットなどが早いテンポで演奏を始めると、狭い部屋の中にひしめき合った人々が、それぞれペアを見つけて踊り始める。激しいステップと回転で否応なく盛り上がるポルカは、音楽的にもハイテンションなものが多く、バルス、マリネラと共にクリオーヨたちの音楽シーンになくてはならない音楽だった。

また、他のクリオーヤ音楽やアンデス音楽に見られないポルカ特有の特徴というか、特筆すべきものとして、サッカーの応援歌などによく使用される、ということもあげられるだろう。今更言うまでもなく、南米のスポーツの筆頭はサッカーであり、国をあげて最も激しく盛り上がる競技である。このサッカーの応援歌、国によってどういう音楽が選ばれるかはいろいろあるが、ペルーでは圧倒的にポルカが多いように思う。

そもそも、もっとも有名なポルカとしてよくあげられる中の1曲が、「ペルー・カンペオン」というペルーのサッカー黄金時代に作られたナショナルチーム讃歌であり、当時のメンバーの名前が歌の中に早口言葉のように織り交ぜられている曲である。一番有名なロス・アセス・デル・ペルーの演奏しているバージョンではトランペットまで入り、勇ましくペルーのサッカーが優勝するだろうと唄い上げている、まさに行け行けのサッカー讃歌だ。

この他にも、例えばリマを拠点とするサッカー・クラブ、アリアンサ・リマなども、その名を冠した有名なポルカがあるなど、サッカーとポルカはペルーでは切っても切れないようである。



あと、なぜだか知らないがポルカでだけ見られる特徴として、例えば代表的なポルカを100曲集めた時に、意外なことに日本のことが歌われた曲が数曲含まれる、ということだ(例えば「コモ・プエレ・ハポネス」など)。20世紀前半は日系人が社会的に徐々に成功し、その反動として時に反日暴動まで起こったペルーだが、ネガティブなイメージだけでなく、ポジティブな面でも当時のペルー社会に対して日本人の影響力がもしかしたら強く、それがこういったレパートリーにも現れているのかもしれない。とはいえ、なぜポルカにだけこういったレパートリーが登場するのか、謎で気になるところである。

このように、20世紀前半期に大いに盛り上がったポルカであるが、20世紀も後半になってくると、盛り上がってきたアフロペルー音楽に徐々にそのお株を奪われ、フィエスタでも演奏される機会が減っていったようである。ポルカ同様、アップテンポで激しい踊りのアフロペルーに押され、演奏される機会は減ったが、素晴らしい曲が沢山眠っているポルカ、ぜひ読者の皆さんも機会を見つけて一度聴いてみてほしいものだと思う。ただ、ポルカだけを延々と聴き続ける、というのは想像以上に苦行になってしまうので、適度にバルスやマリネラなどと絡めて聴くのがオススメです(笑)。(水口良樹)

## ソーセージと豚肉のコカコーラソース丼

### Carne de Cerdo con Chorizo en Coca Cola

2013年の最初のレシピは、日本人の読者にとって、ある意味で目新しい料理です。味のベースにコカコーラを使います。

料理にとりかかる前に、メキシコにおけるコカコーラの消費について説明しておきます。

メキシコは1人当たりのコーラ消費量が世界一と見られており、年間1人114リットル飲んでいません。清涼飲料水全体では米国につづいて2番目とされています。

そんなわけで、あらゆる清涼飲料メーカーがメキシコ市場を重視し、数百万ドルの広告費を投じて新聞やテレビ・ラジオ・雑誌で宣伝し、全国でチラシを配布しています。メキシコの清涼飲料市場の7割をコカコーラ社が占め、ペプシとビッグコーラがそれにつづきます。

その結果、メキシコの多くの地方にコーラを使った料理があり、ユカタンでもたくさん見られます。



ユカタンの人々は社会階層に関係なく、マヤの先住民の人々も含めて、清涼飲料とりわけコカコーラが大好きです。メキシコにいる私の家族や親戚もしょっちゅう飲んでます。

大型のプラスチック製ボトルは、ゴミを減らすため回収して再利用されています。

#### ■材料 4人分

- ・肉じゃがで使うような豚肉薄切り 400g
- ・トマト中 2個
- ・タマネギ中 1/2
- ・ソーセージ(中) 8本
- ・コカコーラ 1カップ
- ・塩とコショウ お好みで
- ・赤ピーマン 1個
- ・バター 大さじ1杯
- ・炊いたごはん

#### ■作り方

1. 赤ピーマンの種を取り除き、1センチ角に切る。
2. トマトを洗って細かく刻む
3. タマネギ半分の皮をむき細かく刻む。ソーセージを薄い輪切りにする。
4. あまり強くない火にフライパンをかけて、バターで肉を炒める。火が通ったら、赤ピーマンとソーセージ、トマト、タマネギを加え、塩とこしょうで味を整える。
5. 火を弱めてコカコーラを加え、ソースが煮詰まるまで加熱する。
6. 深めの皿か丼のような器にご飯をよそい、その上に肉やソースを盛りつける。

## チリ ピノチェット軍事政権時代を調査する記者への嫌がらせ

2012年12月に3人のチリの新聞記者の留守宅に何者かが侵入し、コンピューターとハードディスクが盗まれた。1人はドイツDPA通信の特派員で、この1ヶ月前にニューヨークタイムズの特派員も同様の被害を受けた。これらジャーナリストに共通することはいずれもピノチェット軍事政権（1973～90）時代の弾圧と諜報組織と結びついたケースを調査し、出版していたことだ。盗まれたコンピューターにはピノチェット時代の弾圧についての秘密事項や、諜報機関の作戦などについて多くの情報が入っていた。またある記者は軍事政権によって1973年に殺されたチリの有名な歌手ビクトル・ハラの死の様子について再検証した本を出版していた。チリ政府は被害者に対して安全を確保するとしたが、被害者は政府からは何の連絡もないという。検察や人権に関する捜査班はこの一連の事件を捜査し、関連性があるか調べている。当時の元諜報機関や支持グループからの復讐や、エドゥワルド・フレイ元大統領の暗殺事件と関わりがあるのではないかという容疑がある。フレイ元大統領は1981年のヘルニアの手術後の合併症で亡くなったとされているが、その後CNIによって毒殺されたのではないかと調査されている。被害にあった2人の記者はこの調査で証言していた。検察は元大統領と事件との関連についても調べている。（BBCMUNDO2012/12/21より）

## ドミニカ共和国 女性の権利を守る刑法を要求

ドミニカ共和国は女性への暴力がひどく、2011年には233名の女性殺しがあり、性暴力、DVなど6万7千件の告発があった。昨年に比べて減少してはいるが2012年の10月までにすでに163人の女性が殺されており、そのうち75人が夫や元夫からの暴力によるものであった。現在、議会で刑法改正案が審議されているが、被害者の女性が死亡するか障害者になった場合のみ加害者が処罰されるなど、後退した内容になっていると女性団体から強い批判が出ている。11月22日、首都セント・ドミンゴで副大統領や検事総長、女性省の役人が先頭に立ち女性の尊厳を求めるためのデモを実施した。11月24日には20あまりの女性団体が組織したデモがあった。翌日25日は暴力廃絶のための国際デーであり、またドミニカの独裁政権と闘ったミラバル姉妹が暗殺された日で女性への暴力に対して闘う象徴としてデモで掲げながら、女性の雇用を増やすことなども要求した。ドミニカでは世帯の41.3%が母子家庭である。新しい刑法が女性の生命を尊重すること、審議中の改正法案から後退している内容を外すよう要求している。司法委員会はDV法案や母体に危険がある場合の人口妊娠中絶を認めるなど、女性のために考えた改正案になっていると述べている。（Noticiasaliadas.org/2012/12/19より）

### グアテマラスピーキングツアー送金報告

前回、そんりさ140号にて報告したとおり、昨年11月に開催したグアテマラ戦時下性暴力スピーキングツアー『沈黙をやぶって』は成功裏に終わりました。スピーカーのアリシア・ラミレスさんも無事にグアテマラに帰国しました。こちらからは、世界祈禱献金からの33万円の助成金と、民芸品・カレンダー販売収益の計8000ドルをグアテマラに送ることができました。このお金は裁判費用および原告団女性たちへの同行費用にあてられます。今年はまだ裁判の進展はありませんが、何かあり次第ソソリサ誌上でお知らせします。

#### アリシア・ラミレスさんよりメッセージ

日本の皆さん、スピーキングツアーでは本当にありがとうございました。日本での経験は私のこれまでの人生で最も素晴らしいものでした！ グアテマラに帰ってもしばらくは現実に戻るのが難しいほどでした。裁判をしている女性たちとチームのメンバーには12月に日本ツアーの報告をしました。預かったお土産を女性たちに手渡し、日本の人たちの支援と連帯を伝えました。女性たちはとても喜んでくれましたし、私たち全員にとって大きな励みです。今後もぜひ性暴力裁判の支援をお願いいたします。

先日、ハイビスカス・ティーを飲む機会があった。ホットでもあり、メキシコの食堂で水代わりに飲んでいた"agua de jamaica"とは少々異なるものの、懐かしい気分になるには十分だった。イラク戦争開戦が迫る中、単身メキシコに渡ってから10年になろうとしている。あの頃から世界も自分も、どれほど変化したのか（できたのか）、何となく振り返る時期なのかもしれない。これも先日、やはりメキシコ留学時代の友人と再会したとき、「忙しくてレコムのイベントにはなかなか行けないけど、『そんりさ』は購読しようかな」と言われた。こういうテーマで活動をしていることも重要な存在だとも。こんなつながりも大切にしていきたい、とあらためて思う今日この頃。（杉本唯史）

次回「そんりさ」印刷作業は東京で 月 日、  
 発送は京都で 月 日（土）の予定です。

参加いただける方は連絡ください

メーリングリスト 会員・購読者は無料で参加できます。

E-mail [recom@jca.apc.org](mailto:recom@jca.apc.org)までアドレスを連絡ください

ホームページ <http://www.jca.apc.org/recom>

- |                        |                         |
|------------------------|-------------------------|
| Vol.140 グアテマラ・戦時下の性暴力  | Vol.136 ボリビア先住民族政治と道路建設 |
| Vol.139 グアテマラ・沈黙を破る女性  | Vol.135 あるコロンビア難民の死     |
| Vol.138 パナマ先住民族ンガベ・ブグレ | Vol.134 グアテマラ・ニカラグア報告   |
| Vol.137 グアテマラ視察報告      | Vol.133 グアテマラ総選挙        |

レコムに入会(もしくは購読)すると、メーリングリストにも無料で参加できます。入会したら、自己紹介メールを添えて [recom@jca.apc.org](mailto:recom@jca.apc.org) までご一報を。登録します。レコムの活動は会員のみなさんによって支えられています。

☆郵便振替口座:00110-7-567396 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク

☆会員 年 8000 円(学生 5000 円)...会の運営、総会での投票、『そんりさ』,資料閲覧・貸出

☆賛助会員 年 10000 円(一口)...資料閲覧・貸し出し、『そんりさ』購読、総会への参加

☆『そんりさ』購読者 年 4000 円...『そんりさ』の購読、メーリングリスト参加可

**レコム連絡先**

〒 616-0004 京都市西京区嵐山中尾下町 20-15 太田方

TEL&FAX 075-862-2556(留守電) お問い合わせは、E-MAIL・FAX・手紙もしくは留守番電話にメッセージをお願いします。

<レコム口座>  
 80万9540円

<グアテマラ基金>  
 62万560円  
 (2013年1月現在)